



雄弁の道

アリー説教集

ナフジュニルニバラーガ

アリー・イブン・アビー・ターリブ

黒田壽郎 訳

書肆心水

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

雄
弁
の
道
目
次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

訳者序文 黒田壽郎 一三

第一の説教 二七

第二の説教 三五

第三の説教 三八

第四の説教 四三

第五の説教 四三

第六の説教 四四

第七の説教 四四

第八の説教 四五

第九の説教 四五

第十の説教 四六

第十一の説教 四六

第十二の説教 四七

第十三の説教 四八

第十四の説教 四九

第十五の説教 四九

第十六の説教 五〇

第十七の説教 五三

第十八の説教 五四

第十九の説教 五五

第二十の説教 五五

第二十一の説教 五七

第二十二の説教 五八

第二十三の説教 五九

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第二十四の説教
第二十五の説教
第二十六の説教
第二十七の説教
第二十八の説教
第二十九の説教
第三十の説教
第三十一の説教
第三十二の説教
第三十三の説教
第三十四の説教
第三十五の説教
第三十六の説教
第三十七の説教
第三十八の説教
第三十九の説教
第四十の説教
第四十一の説教
第四十二の説教
第四十三の説教
第四十四の説教
第四十五の説教
第四十六の説教
第四十七の説教
第四十八の説教

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

三八
三九
四〇
四一
四二
四三
四四
四五
四六
四七
四八
四九
五〇
五一
五二
五三
五四
五五
五六
五七
五八
五九
六〇
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八
六九
七〇
七一
七二
七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九
八〇
八一
八二
八三
八四
八五
八六
八七
八八
八九
九〇
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇

第四十九の説教
第五十の説教
第五十一の説教
第五十二の説教
第五十三の説教
第五十四の説教
第五十五の説教
第五十六の説教
第五十七の説教
第五十八の説教
第五十九の説教
第六十の説教
第六十一の説教
第六十二の説教
第六十三の説教
第六十四の説教
第六十五の説教
第六十六の説教
第六十七の説教
第六十八の説教
第六十九の説教
第七十の説教
第七十一の説教
第七十二の説教
第七十三の説教

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

九〇
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇
一〇一
一〇二
一〇三
一〇四
一〇五
一〇六
一〇七
一〇八
一〇九
一一〇
一一一

第七十四の説教
第七十五の説教
第七十六の説教
第七十七の説教
第七十八の説教
第七十九の説教
第八十の説教
第八十一の説教
第八十二の説教
第八十三の説教
第八十四の説教
第八十五の説教
第八十六の説教
第八十七の説教
第八十八の説教
第八十九の説教
第九十の説教
第九十一の説教
第九十二の説教
第九十三の説教
第九十四の説教
第九十五の説教
第九十六の説教
第九十七の説教
第九十八の説教

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

一一三
一一三
一六〇
一五九
一五八
一五七
一五四
一五三
一三九
一三八
一三六
一三五
一三三
一三〇
一三八
一三八
一七八
一七六
一七六
一七四
一七四
一七三
一一三

第九十九の説教	一六五
第 百 の説教	一六六
第百一の説教	一六八
第百二の説教	一六九
第百三の説教	一七一
第百四の説教	一七三
第百五の説教	一七五
第百六の説教	一七七
第百七の説教	一七八
第百八の説教	一八一
第百九の説教	一八七
第百十の説教	一八九
第百十一の説教	一九二
第百十二の説教	一九三
第百十三の説教	一九五
第百十四の説教	一九八
第百十五の説教	二〇一
第百十六の説教	二〇三
第百十七の説教	二〇四
第百十八の説教	二〇四
第百十九の説教	二〇六
第百二十の説教	二〇七
第百二十一の説教	二〇八
第百二十二の説教	二一一
第百二十三の説教	二一二

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第百二十四の説教
第百二十五の説教
第百二十六の説教
第百二十七の説教
第百二十八の説教
第百二十九の説教
第百三十の説教
第百三十一の説教
第百三十二の説教
第百三十三の説教
第百三十四の説教
第百三十五の説教
第百三十六の説教
第百三十七の説教
第百三十八の説教
第百三十九の説教
第百四十の説教
第百四十一の説教
第百四十二の説教
第百四十三の説教
第百四十四の説教
第百四十五の説教
第百四十六の説教
第百四十七の説教
第百四十八の説教

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

二二
二四
二六
二七
二九
三二
三三
三三
三三
三六
三九
三九
三九
三〇
三一
三一
三四
三五
三六
三六
三七
三九
四一
四三
四四
四六

第百四十九の説教	二四七
第百五十の説教	二四八
第百五十一の説教	二五〇
第百五十二の説教	二五三
第百五十三の説教	二五七
第百五十四の説教	二六〇
第百五十五の説教	二六三
第百五十六の説教	二六六
第百五十七の説教	二六七
第百五十八の説教	二六八
第百五十九の説教	二七〇
第百六十の説教	二七四

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

訳者序文 アリーのイスラーム

黒田 壽郎

イスラームという教えの理解の要とされている本書は、ムスリムの基礎的教養の最良の礎とされており、本書の日本語訳の刊行は、イスラームという教えの正確な理解のための金字塔となるであろうことは疑いがない。

筆者は、櫻井秀子教授の協力を得て、正統四代カリフの一人アリー・イブン・アビー・タリブ[▽]の『雄弁の道』(Nahj-i-Balaghah)のアラビア語原典翻訳を進めてきた。『雄弁の道』はアリーの説教、書簡、祈願文からなるものであるが、その説教部分全体(説教総数二百三十九)のページ数にして三分の二ほどを今回刊行するにあたり、この説教集のイスラーム研究における重要性について若干の解説が不可欠であろう。

それにあたってはまず、カリフ・アリーの人となり^{いとなり}を説明することから始める必要がある。イスラームの預言者ムハンマドの従弟^{いとこ}に当たる彼は、この預言者にとりわけ好意

▽アリー・イブン・アビー・タリブ

西暦六〇〇年頃生ゝ六
六一年没。第四代正統
カリフ(在位西暦六五
六年〜六六一年)。

を示した父アブー・タリブの影響もあって、若くしてこの従兄いとこと親しく交わり、行を共にしていた。イスラームへの入信は、ムハンマドの妻ハディースに次いで、男性としては最初の信者であり、信仰上の経歴では断然他より重みのある存在である。

周知のように登場当初のイスラームは、その世界観の革新性ゆえに、当時メッカで支配的地位を誇っていた保守的勢力から強い反発を受けざるをえなかった。その結果、新興イスラーム勢はメッカから逃れ、安住の地を求めてマディーナに逃れることになる。政治的才覚に長けたムハンマドは、この地で辛うじて独立の地位を保つことになる。ところでメッカから逃亡を余儀なくされた折には、アリーは追手の眼をかわすためムハンマドの影武者となつて、一人洞窟に身を隠したりして大きな貢献を果たしている。マディーナで辛うじて独立した地位を保つことに成功したムスリム勢は、この地で始めてのウンマ、社会的共同体を形成することになる。それを成し遂げた年を記念して、イスラーム独自の年号、ヒジュラ暦（イスラーム暦）が創始され、その時がイスラーム暦の元年とされている。

マディーナの地で小規模の独立を勝ち取ったムスリム勢は、一応安堵の胸を撫で下ろしたものの、直ちにメッカの保守勢力からの脅威に曝される。彼らは大挙してマディーナに襲い掛かったのである。幸い最初のバドルの戦いはムスリム側の大勝利に終わっているが、それに続くウフドの戦いでは、預言者ムハンマドは危うく死を免れるような苦境にあっている。

SAMPLE
Shosni-Shinsu.com

メッカとマディーナの勢力関係は長らく均衡を保ったままであったが、この間のアリーの活躍ぶりは特筆に値するものである。当時のアラブ世界では二つの勢力があい戦う場合、両軍はそれぞれ大將を選んで衆人環視の下に一騎打ちを行わせ、その決着がついた後で本番の戦闘に入るといふしきたりがあった。ムスリム勢の場合、最初のバドルの戦い以降、ほとんどすべての重要な戦役において、この役を果たし続けたのがアリーであった。戦意高揚のために最も重要な役割を果たすこのような重責を、生涯にかけて完遂した彼の貢献は他の誰をも凌いでいるのである。

マディーナのイスラーム勢は、強大なメッカの保守勢力に対して辛うじて均衡を保ちえたが、これは決して故なしに成就された訳ではない。それを証すためには、預言者の最後の別れの説教で有名な一句を引くにしくはない。彼は並みいる信者たちを前にして高らかに宣言している。「信者の者たちよ聞くがよい。今日この日の後、神の御前で君たちの名誉、生命、財産は確かに尊重され、君たちの間にはいかなる差別もない。」このイスラームの民主主義宣言は、信者たちの共同体意識に明確に確立されていた。この民主主義は、欧米のそれとは全く構造を異にしているため、多くの人々に正確に理解されてない嫌いがある。ただしこの問題の了解なしに、イスラームの主張の本質を捉えることは完全には不可能なのである。

神との教えであるイスラームは、絶対的な神から被造物に対して下されたメッセージである。その際、神は地上のもの皆に対して、この知らせの内容をこの世で保持し、実

践するものはいないかと呼びかけた。この呼びかけに応じたのは山でも、海でもなく、力ない人間であった。天使もこの重責を担うことを避け、神の命にただ従うだけという立場をとるばかりであった。神の望みを地上で実践し、その意に叶うように努力することを約束するという責務を引き受けたのが、他でもない人間だったのである。このような責務の受託のゆえに、人間はハリファトツララーフ、神の代理人と呼ばれるのである。ハリファというアラビア語は、代理者、代理人を意味するが、俗にカリフと呼ばれるのがこのハリファである。

ところで周知のようにカリフと呼ばれる存在には、二種類がある。第一は、ハリファトツララーフという名そのままでは呼ばれる神の代理人、つまり一人一人の人間個人であり、他のハリファは、ハリファトツララーフ、つまり神の預言者のカリフがこれに当たる。ここで力説しなければならないのは、これら二つのカリフの相違である。後者のカリフは、別名アミール・イルム・ウミニーン、つまり信者たちの長に当たり、預言者の没後ムスリム共同体、ウンマ・イスラミーヤの長として信者たちを統べる役割を果たす。このカリフ職には、当時存在する宗教的知識、道徳心に最も優れた人物が専任され、カリフの後任は厳密な推薦制度に基づいて任命されることが定められていた。

ここで注目に値するのは、イスラームにおける上述の二種類のカリフの存在の位置関係である。その呼称の示すところによると、第一のカリフが神の直接の代理人であるの

に對し、第二のカリフは神の預言者ムハンマドの代理人という名で呼ばれているに過ぎない点が問題である。代理者性という点において、第一のカリフの方が第二のそれに比してより直接的であり、優位にあることは明瞭であらう。これはイスラームの民主主義において、各信者の存在の方が、彼らの長よりも一段と重みを持つことを意味しており、このことが極めて重要なのである。これをいい換えるならば、イスラームの民主主義においては、ウンマの長たるものが、上からではなく、民衆の下にあつて、その理念の維持、実践に努力する者であることを意味しているのである。このような支配者と支配される者の地位の上下の逆転こそ、この民主主義の卓越したところなのである。

このようなウンマを構成する個々の人間の優越性が獲得されるためには、独自の世界観、思想的条件が不可欠である。この問題、つまりイスラームの基本的な政治体制について明快な解説を行っているのが、アリーの説教集『雄弁の道』が説いている政体論である。その解説を行うまえに必要なのは、この議論のイスラームの教えにおける位置である。イスラームにとつての最も基本的な典拠は、いうまでもなく神の言葉、クルアーンである。ところでクルアーンは、神自身の言葉であつて、それを伝えた預言者の創作になるものではないという点が、最も重要な点である。これに関する証拠は、この聖典が啓示された際、ムハンマドが失神状態にあつた事実である。クルアーンが人間の創作になるものではないことを強調し、その点を明確にするためにこの事実は本質的に重要である。クルアーンが神与のものであるということは、イスラームにとつて最も基本的

なものであり、無限なる絶対者、神と被造物の完全な相違、隔たりこそ、この教えの本質と深く関わる点なのである。

神と被造物の絶対的な距離の確認、自覚は、イスラームの本性を自覚させるアルファ、オメガに他ならないが、このような思考の構造こそ、この教えの最も根源的な要素なのである。このような基本的認識に基づいてアリーの政治的考察を検討してみると、一つの明快な政体論が浮かび上がってくる。具体的にこのイスラームの政体論は、説教集『雄弁の道』に簡潔に記述されているが、その骨子を説明する前に一先ずアリー自身の立場の独自性について述べておく必要があるだろう。

先に述べたように預言者ムハンマドは、神の言葉クルアーンを、憑依の状態で啓示された。ただしアリーの立場は、その内容を現世に実現するためという、具体的な目的に適合させるような読み替えの上に成立するものである。神と人との絶対的隔絶という形而上的格差は、ことの本質に依拠するものであるが、それでは現実的な共同体の行動に資するものはない一つ存在しないことになる。このような矛盾を根本的に解決しているのが、アリーの政体論である。彼の議論の詳細については、彼の著作を具体的に引用して検討する必要があるが、一先ずここでその内容を要約して吟味しておくことにしよう。この点に関する要点は、視点の複数性である。

問題の要点を簡略にするために、ここでは西欧の場合と、イスラームの場合の基本的な相違について考察しておくことにしよう。例えばキリスト教の場合、神の意思を代行

して実践するパウロのような教皇が存在している。彼の地位はイスラームの信者たちの長、カリフのそれに似ているが、その実質を比べてみると、両者の間には大きな相違がある。教皇は神与の権威を一身に集めるが、その権威の実質は一般信者に分け与えられることはない。それに反してイスラームのカリフは、神から授かった権威を一般信徒のすべてと共有し合っているのである。注目すべきは神与のものが、決してそれを授かった者の独占物ではないところにある。この差異を生み出すものは、共同体に属するすべての個人が、例外なくあらゆる他者と関係しあっているという、密接な関係性にあるといえるであろう。このような関係性をもたらすものは視点の複数性なのである。

イスラームにおいて各信者は、預言者が「別れの説教」で明言しているように、例外なく等位におかれている。このような事態が成立するためには、各人が独自の複眼を持ち合わせるのが基本的な条件なのである。イスラームの認識論によれば、世界の認識は二つの知的システムから成り立っている。一つは現実に関する主観的な認識であるが、それと同時に存在するのは世界を一即多、多即一というかたちで複合的に捉える観法である。この場合、第一の認識は、眼前の現実を主観的判断によって差異的なものとして捉える。この認識が方便とし、依拠しているのはもっぱら主観であるが、このような認識の問題点は、現実との関連は主観的な要素に限られ、客観的な外部世界に立ち向かうことがない。それが関わっているのは、刻々と移ろい行く無常の虚ろな現実だけなのである。しかしわれわれの認識を確立させるのはいま一つの、他の認識、つまり自他不二

の事態を包含する観法なのである。この観法があつて初めて、認識は外部世界と確実に接触し、渡り合うことになる。認識が外部世界を取り入れることが可能になるのは、この認識あつてのことなのである。

外部世界を取り入れる認識上の構造がなければ、それを手中に入れることは決してできない。一即多、つまり自他不二の認識の構造なくして、個人は外部性に身を開き、被造物のすべてと自由に交感することは不可能なのである。なん度も指摘するように、外界に対する単なる私的な判断は、終始私的なものに留まり、外部の影に触れるのみで、その実質と関わることはない。このような外部性の不在、喪失がもたらすものは、例えば現在の欧米世界の実状、それに過度に影響を受けた現代世界のライフスタイルにも端的に反映されてはいないであろうか。例えば経済生活は、もっぱら欧米流の資本主義に独占され、貨幣を介する交換経済のみが重視され、法人といった似非人間が創始されて優勢を極め、例えば贈与的な側面が完全に軽視される。この道徳的性格を欠いたまま、人間としての資格を与えられた生き物は、いまや金融市場で圧倒的な支配権を獲得し、生活世界で夥しい経済的格差を生み出す原動力となっている。これまでの近代化、進歩、発展のための金科玉条の基本的方策であった資本主義が、いまや完全に地に堕ちていることは、ようやく誰の目にも明らかになっていないであろうか。参加者すべての公正さを保障する仕組みを持ち合わせない社会が、成功するためしなどありえないのである。

アリーの『雄弁の道』には、上述のような欠点とは無縁なイスラームの民主主義に関する重要な指摘がある。彼の主張を紹介するには、それが簡潔、直截に述べられている以下の一つの説教を引用するだけで十分である。

「さて至高のアッラーは、私が君たちの諸事全般の指導を行うという意味において、私の権利を君たちの上に位置づけられた。また私が君たちに対し権利を有するのと同様に、君たちも私に対して権利を有する。権利の種類は幅広いが、公正な分配という点においては限定的である。他の者によって自分が反対される権利を他の者が持たないような者には、権利は生じない。またその反対に、支持する権利がなければ、反対する権利もない。もし反対する権利がなく、支持する権利しかないのであれば、それはひたすらいと高きアッラーのものであり、その権利は、アッラーの権能ならびにアッラーの法令が打ち立てた公正さのおかげによる被造物のためのものではない。もちろんいと高きアッラーは、被造物が神を崇める権利をお創りになった。そして神が物惜しみしない寛容な御方である徴として、神がご自身に対して彼らに幾度にもわたり報奨を与える義務を課された。

そして、いと高きアッラーはご自身の権利から、一定の人々が他の人々に対して有する権利をお与えになった。だが同時に神は彼らを互いに平等になされた。これらの権利のうちのいくつかは、他の権利を生む。権利の中には双務的に生じるものもある。いと

高きアッラーが義務となされたこれらの権利の中で最も偉大なのは、支配者の被支配者に対する権利と、被支配者の支配者に対する権利である。これは至高のアッラーが互いに課された義務である。アッラーはこのような双務関係を彼らが互いに敬愛する基礎、彼らの宗教の誇りとなされた。結果的に、支配者は健全でなければ繁栄することができず、他方、支配される者が健やかでなければ支配者も健全ではいられない。もし被支配者が支配者の権利を実現させると同時に、支配者が被支配者の権利を実現するならば、権利は彼らの間で栄誉となり、教えの道は確立され、公正さの徴は堅固となり、スンナは広められていくであろう。

このように時は事態を好転させ、政府が永続することが期待され、敵の望みは頓挫するであろう。しかし、もしも臣民が支配者を征服したり、支配者が臣民を抑圧したりするならば、さまざまな主張が飛び交い、抑圧の兆候があらわれ、宗教に腐敗がはびかり、スンナの目的が放棄される。そして勝手な欲望がみなぎり、教義が打ち捨てられ、精神の病は限りなく増殖し、重大な権利が損なわれたり、大罪が犯されることになんの苦痛も感じなくなる。このような状況においては、敬神の念は嫌悪される一方、悪徳に栄誉がもたらされる結果、アッラーのたいなる懲罰が下されることになる。

したがって君たちはその点に関して互いに協議し、協力すべきである。たとえ神がご満悦なさることを熱望し、そのために行動する際になんり長期にわたり努力を続けたとしても、誰一人としていと高きアッラーが望むようなかたちで義務を果たすことにはな

らない。しかしアッラーが人々に課した必須の義務は、彼らが能力を十分活かして互いに助言し合い、自分たちの間に真理を確立するために協力することである。」(第二百七の説教)

最後に本書の刊行に当たって、ご支援、ご高配いただいた在日日本イラン・イスラーム共和国大使館、セイイド・アッバース・アラージェチー前大使閣下、ならびにレザー・ナザルアーハーリー大使閣下に心より感謝申し上げますと共に、本書の刊行にご尽力をいただいた書肆心水社長清藤洋氏に謝意を表する次第である。

二〇一七年十月

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

雄弁の道

アリー
ー
説教集

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第一の説教

＊天と地、ならびにアーダム（アダム）の創造について語られる

讃えあれアッラー、言葉によって賞嘆し尽くすことが叶わず、数を用いて恩恵を数え尽くすこともならず、精魂こめて尽力する者もその正當な求めに応えることができず、いかに高邁な知的熟慮も、深遠な理解力もその姿を捉えきれることのないような御方にして、どのような形容も描き尽くせず、十分な称讃も存在せず、時間や持続の物差しでは測ることの叶わぬような御方。その万能の力によって万物を創造し、その恩恵によって風を吹きわたらせ、大地を硬い岩石で固められた御方。

宗教の第一は、彼を知ることである。そして彼についての知の完成は、彼を正しいとすることであり、彼の正しさの完成は、その唯一性の確信である。また彼の唯一性の確信の完成は、その純粋性の認識である。彼の純粋性は、彼にいかなる属性も認めない。なぜならばなんらかの属性を認めることは、その属性がそれによって形容されるものと異なり、また属性によって形容されるものを認めることは、それが属性そのものと異なることを意味するからである。

そして至高のアッラーに属性を付与する者は、アッラーに似たものを認める者であ

※下段の注釈と上段本文に挿入の「」は訳注

り、彼に似たものを認める者は、その二者性を容認することになり、そうする者は彼を細分化することになり、そうする者は彼を見誤る。そして彼を指さす者は、彼を限定し、彼を限定する者は、彼を数え上げることになる。そして彼がなんの中にあるかと問う者は、彼をなにもものに閉じ込め、なんの上にあるかと問う者は、なんの上にもないことを知る。

＊宇宙の創造について

その存在は生起によるものではなく、無から存在した訳でもない。彼は万物と共にあるが、物理的隣接によるものではない。またすべてのものと異なるが、分離している訳ではない。彼は行為を行うが、運動とか道具のような意味においてではない。そして被造物に見えるものがない場合でも、視力を用いる。彼は共に過ごすものがなく、それが不在であることにいかなる不満もないまま、唯一の存在である。

彼は創造を行い、それを開始したが、とりわけ深く配慮した訳でもなく、経験にすぎたりせず、特に新たな運動を創り出したり、心痛に悩んだりした訳でもない。もの皆に時間を割り当て、異なったものをまとめ上げ、特別な性質を与え、さまざまな姿かたちを与えたが、仕事を始める前にそれらについて熟知し、その範囲、限界について、ないしは特徴、複雑さについても完全に弁えていた。

至高のアッラーは空間を切り拓き、それを押し広げ、空氣に場所を与えた後にそこに水を流したが、その荒れ狂う波頭は互いに揉み合い、それは激しい強風、荒々しい台風にぶつかった。そこで風が水を押し戻すように命じ、水の勢いを抑えつけ、それぞれの領分が定まった。風は下から吹き荒れ、水は風の上で逆卷いた。

次いで至高のアッラーは風を創り、その勢いを抑え、力を一定にしたが、その動きは強く、遠く遙かに広まった。そして風に海を波立たせ、大洋に大波を起こさせるよう命じた。そこで風は乳を凝縮させるように水を掻き混ぜて、力強く空一面に吹き上げ、最初の泡は最後の泡の上に積み重なり、静かな層ができ上がったが、それらは盛り上がり、表面は泡で一杯だった。

それからアッラーはその泡を大空一面に引き上げ、それをならして七つの天を創った。そして低いものは波状にしつらえ、高みのものは下を保護する天井のようにし、支える柱もなく、固定する釘一本もないような高い建造物にした。次いで星や流れ星の光でそれを飾り、回転する天球、移動する蒼穹、運動する大空の中に光り輝く太陽、静かに光る月を備えた。

＊天使の創造について

それからアッラーは高みの天の間に空間を設け、そこをさまざまな天使たちで満たし